

観光と文化

——マリアナ諸島グアム・サイパンのチャモロの歌と踊りの歴史——

長島 怜央

はじめに

グアムやサイパンを訪れると、「チャモロダンス」という歌と踊りを目にすることがある。ビーチ沿いのリゾートホテルのディナーショー、ナイトマーケットのステージ、ショッピングモールなどの商業施設での催し物などで、おもに日本や韓国などからの観光客向けに披露される。

現在広まっているチャモロダンスは、グアムやサイパンなどを含むマリアナ諸島やチャモロの創世神話、祖先崇拝、自然環境や文化を内容とするものが中心である。チャモロ語で歌いながら、その内容を手の動きなどで表現するものが多い。流派によって異なるので、ここではもっとも幅を利かせている流派に話を限定する。衣装はハワイのフラのそれと似ている。男性は上半身裸でフンドシを巻き、その上からココヤシの葉などで作ったスカートをはくこともある。女性は上半身をパレオで巻き、ココヤシの葉などのスカートをはいている。頭飾り、ネックレス、足飾りなども身につけている。踊りによっては、スティック（短いものや長いもの）を手に持つ。楽器はギターやジャンベ（西アフリカ発祥の打楽器）をおもに用いる。ほら貝も使う。また、このような古代チャモロ人の踊りとされる「アンシエント」とは別に、スペイン統治時代の文化的要素を取り入れた「スパニッシュ」という種類の踊りもある（中山 2018）。

観光客はこうしたチャモロダンスによってエキゾチックな雰囲気を楽しむことができる。グアムやサイパンの観光はレクリエーション・ツーリズム（娯楽観光）としての側面が大きく、砂（sand）、海（sea）、セックス（sex）、ショッピング（shopping）の4Sが中心となっている。文化や歴史に関する要素、またはエスニック・ツーリズム（民族観光）的な要素はないことはないが、一部の人の関心に限られる（スミス編 2018）。しかしながら、目的や過ごし方は人によってさまざまであっても、チャモロダンスのようなローカル文化または先住民文化に触れることで、海外旅行は確実に彩られる。観光客が太平洋の島々に持っている楽園イメージを確認または補強するものとして、すなわち南の楽園における欠かすことのできない「擬似イベント」（プーアスティン 1964）を構成するものとして、チャモロダンスは重要な役割を果たすであろう。

他方で、チャモロの人びとのあいだでもチャモロダンスを含むチャモロ文化は重要なものである。太平洋の島々は植民地主義やグローバル化にさらされ、欧米諸国や日本などから影響を強く受けてきた。スペイン、アメリカ、ドイツ、日本の植民地支配のなかで、マリアナ諸島の人びとは、外来の文化を受容し、土着の文化を蔑むようにもなってしまった。しかしながら、20世紀後半にグアムの脱植民地化の動きとともに、チャモロ文化を再評価する動きが出てきた。チャモロの政治的・文化的アイデンティティの再構築がなされてきたのである。そのような意味で、現在のチャモロ語、チャモロダンス、チャモロ工芸品は、チャモロの人びとの誇りの源泉であるだけでなく、その表出でもある。

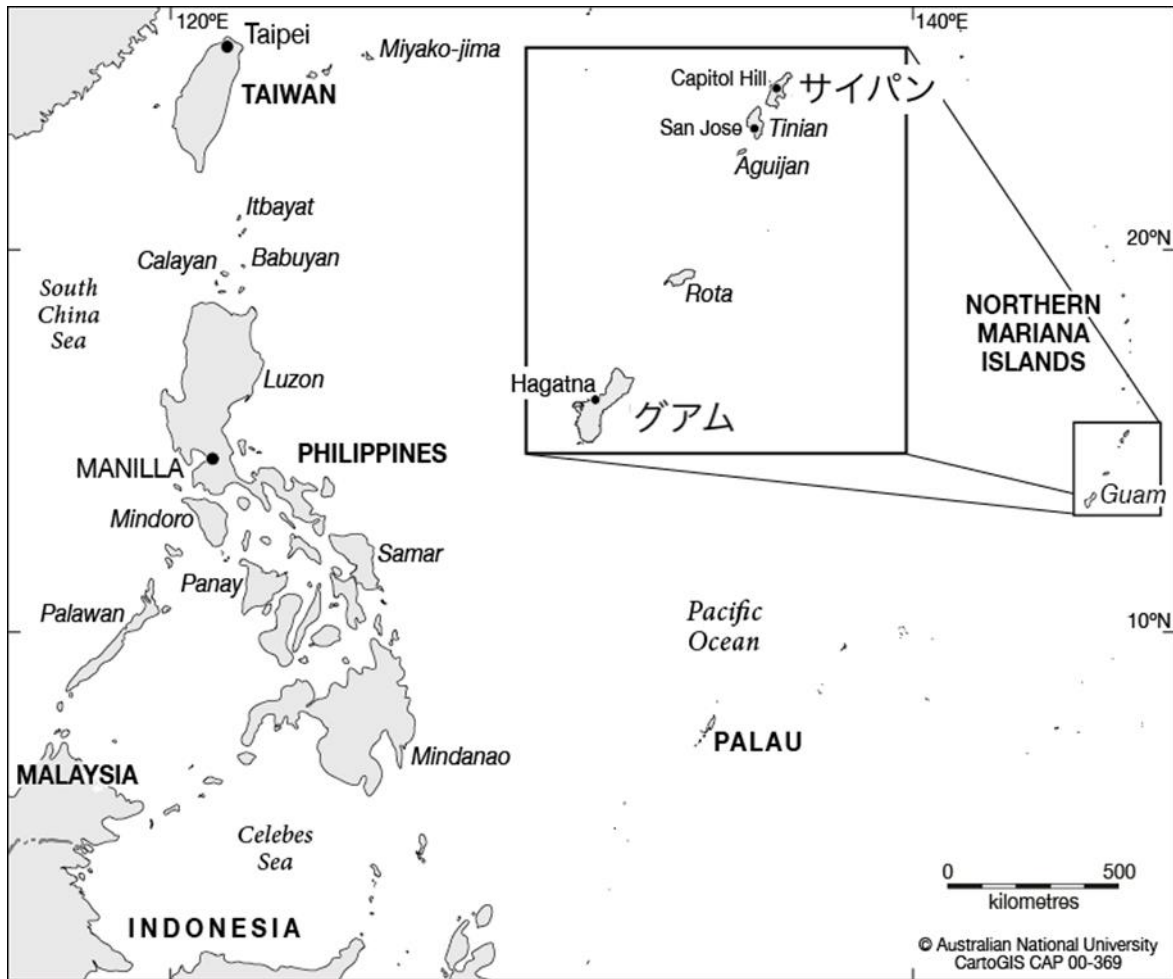


図 1 アジア太平洋地域におけるグアムとサイパン

(出典：CartoGIS Services, College of Asia and the Pacific, The Australian National University)

ここで示したようなグアムやサイパンでの観光と文化の関係を見て、「観光（産業）のなかでチャモロ文化が活性化している」と捉える者もあるかもしれない。実際、観光によって現地文化が破壊されているという見方は一面的であるとし、観光によって文化が活性化した事例を紹介する論者が数多くいる。人類学者の山下晋司は、20世紀に入ってバリの文化が欧米人に注目され、バリが急速に観光開発されていくなかで、バリの伝統文化が新たに創造されていったことを強調する（山下 2007）。観光と文化またはエスニシティ、エスニック・アイデンティティの関係については、日本でもこれまで人類学・社会学の分野でさまざまな議論が展開されてきた（石森編 1996；山下編 2007 など）。

山下をはじめ多くの論者は、アメリカの文化批評家ジェイムズ・クリフォードのいう文化の語り口（「消滅の語り」と「生成の語り」）の議論（クリフォード 2003）を参照し、観光と文化の関係を論じている。文化はそもそも静的かつ不変なものではなく、動的かつ異種混血的なものである。観光の影響による文化の変化は、文化や伝統が失われているのではなく、それらが新たに創造されている、というのである。こうした研究は、観光と文化の動態的な関係、ときには両者のポジティブな相互作用を明らかにしてきたのである。

しかしここで、観光や観光開発とはそんなに生易しいものであるのかという疑問が生じないであろうか。これまで多くの批判を浴びてきた観光の負の側面を、私たちはどう捉えたらよいのであろうか。観光によって社会が豊かになるという言説の一方で、観光による自然環境の破壊、文化遺産・歴史遺産の破壊、大資本による土地の買

い占め、搾取、セックス・ツーリズム、文化の商品化、感情労働など、観光がもたらす現地社会への影響がアジア太平洋地域でも問題視されてきた（松井 1993；トラスク 2002 など）。

グアムやサイパンのチャモロ文化またはエスニシティは観光とどのような関わりを持ってきたのであろうか。本稿は、チャモロ文化のなかでもとくに歌と踊りに着目して、観光と文化、エスニシティまたは文化的アイデンティティの関係について考えてみる。

1 植民地支配と文化——チャモロ文化の断絶と異種混雑性

本稿はチャモロ人やチャモロ文化を取り上げるが、じつはそれらは自明の存在ではない。例に漏れず、グローバル化や植民地主義を経るなかで、マリアナ諸島における民族や文化にも疑義の目が向けられてきた。「チャモロ人とは誰か」「チャモロ文化とは何か」といった問いが多くの人びとの関心を集めてきたのである。

マリアナ諸島に最初に人類が定住したのは、いまから 3500 年前頃と考えられる。東南アジアの辺りから船で渡ってきたのである。現代の分類では彼らは古代チャモロ人と呼ばれ、独自の文化を形成した。

しかし、「マリアナ諸島の先住民チャモロ」といっても、現代のチャモロ人のほとんどはアメリカ的な生活を送っている。ここでいう「アメリカ的な生活」とは、アメリカの教育を受け、アメリカのマス・メディアに日常的に接し、アメリカ英語（チャモロなまりを含む）を話し、アメリカ人として生きていることを意味する。1 世紀以上にわたってアメリカ領であるグアムは、とくにアメリカ化している。また、グアムや北マリアナ諸島（サイパンなど）にいるのと同じくらい、西海岸中心にアメリカ本土に多くのチャモロ人が生活している。各地のチャモロ人がさまざまな形でつながり、またはつながる可能性を持っており、チャモロ人は現代的なディアスポラ（離散の民）であるともいえる。

では、アメリカの影響を受ける前はどうかだったのであろうか。マリアナ諸島は 17 世紀後半から 200 年以上にわたってスペイン領であり、19 世紀末にグアムはアメリカ領、北マリアナはドイツ領となった。北マリアナはその後、南洋群島の一部として日本が約 30 年間統治する。グアムはアジア・太平洋戦争中に日本が 32 カ月間占領したあと、アメリカが戻ってきた。戦後の北マリアナは 1947 年からアメリカを施政権者とする国際連合の太平洋諸島信託統治領の一部となり、1978 年からアメリカ領となった。つまり、マリアナ諸島の人びとは、アメリカの前にもいくつかの国々によって植民地支配されるとともにグローバル化にさらされてきた。チャモロ人はそのなかを生き抜いてきたのであり、彼らの文化はそのなかで生成してきたものである。

ただし、チャモロ文化について考えるには、マリアナ諸島の人びとに多大な影響をおよぼした歴史的出来事について触れておかなければならない。マリアナ諸島とヨーロッパ人の最初の接触は、ポルトガル人のフェルディナンド・マゼラン率いるスペイン艦隊の 1521 年のグアム来訪である。16 世紀後半からは、グアムはフィリピンのマニラとメキシコのアカプルコを結ぶガレオン貿易の中継地点となった。17 世紀後半には、イエズス会の宣教師ディエゴ・ルイス・デ・サンビトレス神父がマリアナ諸島での布教活動を始めた。しかし、チャモロ人のあいだで布教活動への不信が高まるなか、サンビトレス神父はチャモロ人首長らに殺されてしまう。スペインはメキシコやフィリピンからマリアナ諸島に軍隊を送り込み、チャモロ・スペイン戦争と呼ばれる 30 年近い争いへと発展していった。

スペイン人らとの接触で広まった疫病やチャモロ・スペイン戦争によって、チャモロ社会は劇的に変容した。諸説あるが、マリアナ諸島全体のチャモロ人口は接触前には 5 万人から 10 万人であったが、18 世紀半ばにはわずか 2000 人にまで減少したと考えられている。その結果、それまで存在していた文化の多くが失われてしまった。たとえば、マリアナ諸島ではラッテという巨大な石柱が建てられていたが、その技術や情報は途絶えてしまった。ちなみに現在では、ラッテは家屋の土台として使われていたと考えられている。他方で、スペイン人、メキシコ

人、フィリピン人男性の流入、彼らとチャモロ人女性の婚姻などによって、マリアナ諸島人口のカトリック化と混血化、文化のハイブリッド化（雑種化、異種混濁化）が進んだ。

もちろん、歌や踊りも同様である。社会自体が根本的に変わってしまったなかで、人びとの日常生活や儀礼などと結びついた歌や踊りといった文化が断絶してしまい、スペインやフィリピンからの文化的影響が強まっていったことは想像に難くない。マリアナ諸島の人びとはその後も歌い踊りつづけたが、それらのなかに接触前の要素がどれほど残っていたであろうか。そして、アメリカ化が進んだ 20 世紀後半マリアナ諸島のチャモロ人たちは、チャモロ文化とは何なのか、チャモロの歌や踊りとは何なのかという問いに直面しはじめるのである。

2 文化復興運動——チャモロ・ルネサンスのなかの歌と踊り

(1) 軍事化・アメリカ化・多文化化

第二次世界大戦での日本の占領や日米の戦闘を経て、グアムでは再び米軍の統治がはじまった。米軍は住民の土地を接収し、北部には空軍基地、南部には海軍基地を置いた。戦後の太平洋は「アメリカの湖」となり、そのなかでグアムは「槍の先端」とも称されるアメリカの軍事植民地として発展した。グアムの人びとの運動の結果、1950 年にアメリカ連邦議会で成立したグアム基本法によって、グアムは軍政から民政へ移行し、住民はアメリカ市民権を付与された。他方で、経済的には米軍基地に依存し、雇用もグアム政府関連のものがほとんどであった。米軍に入隊し、戦地に派兵されるチャモロ人の若者も増加した。

学校教育もアメリカ本土と同様のものが本格的に導入され、新聞、雑誌、ラジオ、テレビといったマス・メディアも米軍やアメリカ本土企業の影響下にあった。マリアナ諸島ではもともとチャモロ語が話されていたが、英語強制政策のもと戦後は急速に英語に取って代わられていく。また、戦後のアメリカ本土、フィリピン、韓国、ミクロネシアの島々などからの移民の流入によって、グアム社会の多文化化も進んだ。

こうしたグアムの軍事化・アメリカ化・多文化化の進行によって、チャモロ人住民の意識も変化していった。グアムのチャモロ人は「グアム人 (Guamanian)」となり、チャモロ人ではなくアメリカ人としてのアイデンティティ（自己認識）を持つようになっていった。グアムというアメリカの植民地において、グアム人というアメリカ愛国心の強いエスニック集団が誕生したのである。

(2) チャモロ・ルネサンス

しかし 1970 年代以降、チャモロ人としてのアイデンティティをもつ人びとがグアムで増加していく。当時、非編入領土というグアムの政治的地位をめぐる議論、つまりグアムの脱植民地化をめぐる議論が活発化していた。そのなかで、グアムのアメリカへの統合を主張する人びとがいる一方で、グアムの独立やチャモロ人の自己決定を訴える人びとも出てきていた。また、マリアナ諸島やチャモロ人の歴史の見直しや文化復興の動きも出ていた。たとえば、それまで使用が禁じられていたチャモロ語が、学校教育に導入されたり、公用語になったりした。

チャモロ人の運動の背景には、アメリカ国内におけるエスニック・マイノリティや先住民の運動の隆盛、世界的な脱植民地化の潮流、とくに近隣のミクロネシアの島々での脱植民地化の議論の進展、オセアニアでの文化芸術活動や文化復興運動の隆盛（たとえば太平洋芸術祭）などがある。そうした世界各地の動きとの相互作用のなかで、チャモロの先住民としての政治的・文化的アイデンティティの再構築がおこなわれ、チャモロ・ルネサンスというマリアナ諸島の文化復興運動が展開したのである。

(3) チャモロの歌と踊りの再創造

太平洋芸術祭は、1972 年からオセアニア（太平洋地域）で 4 年に 1 度開催される文化関連のイベントである。

主催する国・領土に各地の参加国からダンサー、ミュージシャン、アーティストなどからなる代表団が集まる。グアムでも 2016 年に第 12 回太平洋芸術祭が盛大に開催された。

チャモロの歌（チャント）や口述歴史（オーラル・ヒストリー）に関する在野の研究者であるレナード・イリアティ（1960 年生まれ）は、1976 年にニュージーランドのロトルアで開催された第 2 回太平洋芸術祭での体験がチャモロ文化に強い関心に向ける契機となった。そのときのグアム非公式代表のなかに、歌唱活動をおこなっていたイリアティ家も加わっていた。10 代半ばのイリアティは、他の島々とグアムの文化の違いを目の当たりにして愕然とした。そこから、ヨーロッパ人との接触以前、植民地化以前のチャモロ文化がどのようなものであった



図 2 グアムのショッピング施設で地元住民に向けて披露されるチャモロのチャント（2007 年 8 月、筆者撮影）

か、探究を始めたのである。イリアティはチャモロチャントの第一人者として活躍していくことになる（図 2）。

チャモロダンスの代名詞でもあるフランク・ラボン（1954 年生まれ）もまた、太平洋芸術祭が人生の転機となった。1970 年代以降、グアムでダンサーとして活動していたラボンは、ポリネシアンダンスを通じて太平洋の文化に関心を持つようになった。そのようななか、1984 年にニューカレドニアのヌーメアで開催予定の第 4 回太平洋芸術祭（紛争のため中止）での、グアム・プログラムの踊りの振り付けを依頼された。それ以降、ラボンはチャモロダンスの再創造に取り組みはじめ、自らのダンスグループを「タオタオタノ（「この土地の人びと」の意）」というチャモロ語の名称に変更した。そして、ラボンのチャモロダンスの活動はマリアナ諸島やアメリカ各地に広まっていく（図 3、図 4）。

太平洋芸術祭に表れているようなオセアニアの文化芸術活動の盛り上がりや島々のあいだでの交流の深まりの影響をチャモロ・ルネサンスは強く受けた。また、こうした活動がグアムの人びとにチャモロとしての自己認識（アイデンティティ）を植え



図 3 日本からの修学旅行生にチャモロダンスを披露するグアムの高校生（2006 年 11 月、筆者撮影）



図 4 チャモロ月間のイベントでチャモロダンスを披露するグアムの中学生（2014 年 3 月、筆者撮影）

付け、チャモロ・ナショナリズムのような政治的運動にも影響してきた。運動の場でチャモロの文化的実践が見られたり、チャモロ文化活動において政治的主張がおこなわれたり、両者の親和性は高い。

再創造されたチャモロの歌や踊りは、いまやマリアナ諸島のいたるところで目にすることができる。観光客に向けて披露されるだけでなく、チャモロダンスは、学校教育のなかで取り入れられているほかに、島内各地で多くのグループ（「グマ」と呼ばれる）が活動し、多くの子どもたちや若者たちが練習に励んでいる。さらに、先祖の慰霊、グアム政府の会議や行事、チャモロ文化関連の行事などでは、チャモロの歌や踊りは欠かせないものとなっている。

3 文化と観光——「南の楽園」のチャモロダンス

(1) 匿名の楽園

1962年に米海軍によるグアムの出入域制限が撤廃され、グアムに観光開発の機運が生まれる。63年にはグアム観光委員会が設立された。64年には日本の海外渡航自由化がなされ、67年にはパンナム（パンアメリカン航空）の東京－グアム直行便が就航した。60年代末からグアムでは観光開発が進められ、もともと密林であったタモン地区は、ハワイのワイキキを模した姿に変化していく。

当時の日本人にとって、グアムは観光地としてけっして魅力的な場所ではなかった。パンナムが就航した当時は、ベトナム戦争のさなかで、米軍基地としてのイメージが日本人に強く持たれているときであった。グアムがどこにあるかさえ認知されていなかった。しかし、1960年代末以降、次第にテレビ、新聞、雑誌、広告、歌謡曲や映画などのメディアにグアムが登場するようになった。メディアによって観光地としてのグアムが売り出されていったのである。「グアム観光の父」とも呼ばれるバート・アンペンゴは、テレビの紀行番組「兼高かおる世界の旅」（TBS系列）の影響の大きさを語っている（山口2007: 80-81）。

ここで重要なのは、日本のメディアでグアムがどのように表象され、日本人がどのようなグアムのイメージを持っていたかである。グアムは第二次大戦で日本が「大宮島」として占領し、日米の戦場となった島である。そして、1960年代以降、慰霊や遺骨収集のために多くの日本人が訪れるようになった。しかしながら、戦後の日本社会はそうした過去を急速に忘却していった。社会学者・山口誠はそうしたグアムのことを「戦争を埋立てた楽園」と表現した。山口は60年代・70年代の日本の映画作品（たとえば、70年に公開された加山雄三主演「ブラボー！若大将」）や新聞記事を用いて、グアムの「大宮島」の記憶が「南の楽園」イメージに置き換えられていったことを論じる。そして、つぎのようにグアムと日本人の関係を言い当てている。「日本人が『グアム』に期待したのは、固有の名前と歴史を持つ米領グアムではなく、『青い海、白い砂』を持つ匿名の楽園だったのだ」（山口2007: 88）。

その後も、匿名の「南の楽園」としてのグアムの存在は大きくは変わっていない。もちろん、新婚旅行者だけでなく、大学生など若者グループの旅行、シニア世代も含めた家族旅行、高校の修学旅行など、観光客は多様化していった。また、かつてのグアムは日本人観光客によって占められていたが、2010年代にはいとLCCの就航で韓国人観光客が目立つようになった。しかし、安近短のグアムでの目的や過ごし方は変わらない。飛行機に乗って日常を離れ、常夏の島で過ごす。海で泳いだり、マリンスポーツをしたり、ビーチで横になったりする。ゴルフをしたり、射撃をしたり、ストリップバーに行ったりする。バーやモールや大型スーパーや免税店で買い物をして、アメリカ料理や地元料理を味わい、マッサージ店でリラックスする。地元の歴史や文化に触れられる観光スポットを訪れる者もいるが、少数派である。

(2) 日本人にとってのチャモロ文化

ハワイといって思い浮かべるものはさまざまであるが、フラダンスやハワイアン・ミュージックといったハワ

イの先住民文化またはローカル文化のイメージが流布している。他方で、グアムやサイパンにそうした文化のイメージはどれほどあるか。

グアムで長年使われているキャッチコピーは“Where America's day begins”（アメリカの日が昇る場所）であり、“Guam, USA”（米国領グアム）とともに土産物のパッケージなどでも使用されてきた。グアムやサイパンがアメリカであることはひとつの売りとして観光産業では認識されてきた。

グアム政府観光局が1976年に日本人のグアムに関する意識調査を実施している（「グアム観光局が調査 あなたにとってグアム島とは… 戦跡？観光地？横井庄一さん？」『朝日新聞』1976年4月22日、朝刊）。ここでは調査の詳細は省くが、その概要を伝える新聞記事によると、日本人のグアムに対するイメージは、①太平洋戦争の戦跡（33%）、②観光地（29%）、③美しい海（25%）、④横井庄一さん（15%）という結果となっている。戦争体験世代と戦後世代でイメージにギャップがあったと考えられる。1972年1月にグアムで元日本兵の横井庄一氏が発見された衝撃の余韻もあったのであろう。

しかし、ここで注目したいのは、当時の日本でグアムには文化的なイメージがなかったということである。この調査によると、チャモロ人やチャモロ文化について、全体の77%が知らなかった。23%は知っているとする意外に多い気がするが、ハワイ人やハワイ文化について知っているかという設問への回答と比べるとかなり少ないであろう。

現在も日本人のチャモロ文化への関心は、ハワイ文化への関心と比較すると圧倒的に低い。そうしたことは、観光ガイドブックの内容を分析して検証するとわかる。数十年前と比べると、近年ではチャモロ文化への関心の高まりもあり、一定程度それらに紙面が割かれるようになってきてはいる。しかし、観光客の消費をおおだけのガイドブックが大多数であろう。

本谷有希子の小説「グ、ア、ム」にはグアム旅行に関する興味深い描写がある。グアムにやってきた20歳の姉妹と母の3人は、ツアーデスクで勧められたチャモロビレッジという観光施設でのナイトマーケットに向かう。観光客向けの路線バスで移動中、次女はガイドブックでチャモロの「文化、歴史、料理、伝説など」について学ぶ。

その一方で、チャモロビレッジに到着したときの姉妹の反応は正直である。そこでは民族音楽のリズムが聞こえ、松明が焚かれている。「長女の働いているスパ内にある、ハワイアン風ヒーリングサロンがちょうどこんな感じのムードだ、と思った。次女はこないだ恋人と訪れたテーマパークにもこんな感じのエリアがあった、と思っていた」（129-130頁）。チャモロビレッジはどこにでもありそうな南国風の場所だ、というわけである。

3人はチャモロビレッジで太鼓の鳴るほうへ歩いていき、チャモロダンスに遭遇する。「視界が開けると、そこでは腰に藁を巻いたチャモロ族が原始的な太鼓の音にすべてを委ね、踊っていた」（148頁）。「やる気があるものと、ないもののダンスの差は歴然としていた。受け継がれた伝統的な振り付けだけは一応あるらしいものの、手足の角度や音の取り方はバラバラで、表情もそれぞれだった」（149頁）。3人の目にはチャモロダンスは昔から伝わる伝統的な踊りに見えている。

この作品は2008年に発表されたものであり、時代設定は2000年代のようである。3月の2泊3日のグアム旅行は慌ただしく展開する。「常夏の島」や「楽園」であれば、行き先はどこでもよかったのであろう。ガイドブックを開くまではチャモロ文化に関する知識どころか、その存在すら知らなかったのかもしれない。グアム観光への皮肉をちりばめたこの作品は、日本人にとってのグアムの存在を的確に表現している。

(3) グアム観光のなかのチャモロ文化

では、グアム観光のなかで、チャモロ文化、とくにチャモロの歌や踊りはどのように位置づけられてきたのであろうか。グアム政府観光局の政策、ホテルや旅行会社のプラン、ガイドブックなどを分析する必要があるが、こうしたテーマでの本格的な研究はいまだおこなわれていない。しかし、これまでに明らかになっていることで、ある

程度把握することはできる。

前出のチャモロダンスのマスターであるフランク・ラボンは、1970年代にグアムのホテルでポリネシアン・ディナーショーを目にしたことで、ポリネシアンダンスを習いはじめた。グアムの観光産業が提供していた文化は、チャモロのもの、ミクロネシアのものではなく、ハワイアンやタヒチアンといったポリネシアのものであった。現在では、チャモロダンスのショーを実施しているホテルもあるが、ポリネシアンダンスやサモア発祥のファイヤーダンスはいまだにグアムやサイパンのホテルで見ることができる。長らく観光産業のなかでチャモロダンスは存在しなかったか、周縁的な存在であったといえる。

ハワイのような観光地では、ホテルや娯楽産業のビジネスの側に力があり、彼らのもつ楽園イメージが観光産業全体に大きく影響する。地元のミュージシャンやダンサーといった演者の大多数は、低賃金で散発的な雇用では物価の高い観光地では生活していけず、少しでも仕事を得られるよう雇用主の意向を受け入れざるを得ない(Buck 1993: 178-9)。グアムも同様であり、観光産業においてチャモロ文化がポリネシアン文化の支配的な地位を奪うことは容易ではない。

しかし、いまやグアム政府観光局や観光産業がチャモロ文化をグアム観光の売りのひとつと見なすようになっている。たとえば、同局は日本でチャモロダンスアカデミーを主催し、チャモロダンスを日本人にアピールしている。近年では、チャモロ文化に関連した観光施設もグアムにいくつか存在している。

他方で前出のレナード・イリアティは、そうした観光産業から距離をとるといふより、むしろそれを痛烈に批判してきた。チャモロの歌や踊りは観光客に見せるためのものではなく、チャモロ人のためのものであると主張した。イリアティらは、歴史を伝え、先祖を敬うものとして、チャモロチャントを再創造していった。そうしたチャントは、グアムのチャモロ文化関連イベント、埋葬地での慰霊などで披露されてきた。

さまざまな立場があるにせよ、グアム観光において、かつて周縁的な存在だったチャモロ文化が存在感を示すようになっていることはたしかである。チャモロ文化と観光の関係は今後どのようなものとなっていくのだろうか。

おわりに

1970年代以降、グアムの文化実践者たちは、スペイン人がやってくる前のチャモロの歌と踊りを再創造した。そしていまやそれらは伝統的なものとしてマリアナ諸島で広く受け入れられている。文化関連のイベントで、政治的な集会で、埋葬地で、学校で、そしてホテルやナイトマーケットの観光客の前で、チャモロの人びとはチャモロ語で祈り、歌い、踊る。

本稿で見てきたように、チャモロ文化は、かならずしも観光によって活性化してきたわけではない。観光による再創造という側面もなくはないが、どちらかというところ、観光と向き合うなかで立ち上がってきたといったほうが適切であろう。そして、それは観光にとどまらず、グローバル化や植民地主義に向き合うなかで、人びとが生き抜くために生み出してきたものでもある。そして、チャモロの文化実践者たちが観光産業を変え、そこにチャモロ文化の居場所を作り上げてきたのである。

日本からの観光客の多くはチャモロ文化についてよく知らないし、チャモロ人の存在すら知らないかもしれない。それは日本におけるグアム・イメージやサイパン・イメージの形成、グアムやサイパンにおけるチャモロ文化の不遇によるところが大きいであろう。観光のなかでチャモロ文化は長らく不可視化されてきた。おそらく、韓国や台湾についても日本と事情は変わらないであろう。

しかし、観光にはそうした問題はあるにしても、さまざまな可能性もある。観光によってグアムの歴史やチャモロ文化について知ることはいくらかでもできる。チャモロの歌や踊りの再創造、チャモロ語の復興などの歴史を知

ることで、チャモロ文化の奥深さを理解することができる。グアムを含むマリアナ諸島における日本やアメリカの植民地支配の影響、米軍基地問題にみられる各国の軍事主義をはじめ、この地域が抱えるさまざまな問題についても、観光によって理解を深めることができる。観光はゲストがホストをまなざすだけでなく、ゲストとホストの両者を含めた人びとが出会い、語り、触れ合うものでもある（吉見 2018）。だからこそ、観光の魅力は尽きない。

【参考文献】

- 石森秀三編（1996）『観光の二〇世紀』ドメス出版
- 井上昭洋（2014）『ハワイ人とキリスト教——文化の混淆とアイデンティティの再創造』春風社
- 大野俊（2001）『観光コースでないグアム・サイパン』高文研
- クリフォード、ジェイムズ（2003）『文化の窮状——二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信ほか訳、人文書院
- スミス、ヴァレン・L. 編（2018）『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』市野澤潤平ほか監訳、ミネルヴァ書房
- トラスク、ハウナニ＝ケイ（2002）『大地にしがみつけ——ハワイ先住民女性の訴え』松原好次訳、春風社
- 中山京子（2018）『グアム・チャモロダンスの挑戦——失われた伝統・文化を再創造する』明石書店
- 長島怜央（2015）『アメリカとグアム——植民地主義、レイシズム、先住民』有信堂高文社
- ブーアスティン、ダニエル・J.（1964）『幻影の時代——マスコミが製造する事実』星野郁美・後藤和彦訳、東京創元社
- 松井やより（1993）『アジアの観光開発と日本』新幹社
- 本谷有希子 [2008]（2011）『グ、ア、ム』新潮社
- 矢口祐人（2005）『踊る東大助教授が教えてくれたハワイとフラの歴史物語』イカロス出版
- 山口誠（2007）『グアムと日本人——戦争を埋立てた楽園』岩波書店
- 山下晋司編（2007）『観光文化学』新曜社
- 山下晋司（2007）「〈楽園〉の創造——バリにおける観光と伝統の再構築」山下編『観光文化学』新曜社
- 山中速人（1992）『イメージの〈楽園〉——観光ハワイの文化史』筑摩書房
- 山中速人（1996）「観光地イメージの形成——商品としてのハワイ」石森編『観光の二〇世紀』ドメス出版
- 吉見俊哉（2018）「観光のまなざし／上演する地域——現代文化としての地域」『現代文化論——新しい人文知とは何か』有斐閣
- Buck, Elizabeth (1993) *Paradise Remade: The Politics of Culture and History in Hawai'i*, Philadelphia: Temple University Press.
- Picard, Michel & Robert E. Wood eds. (1997) *Tourism, Ethnicity, and the State in Asian and Pacific Societies*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

（ながしま れお 平安女学院大学国際観光学部）